

地域の底力

直島町



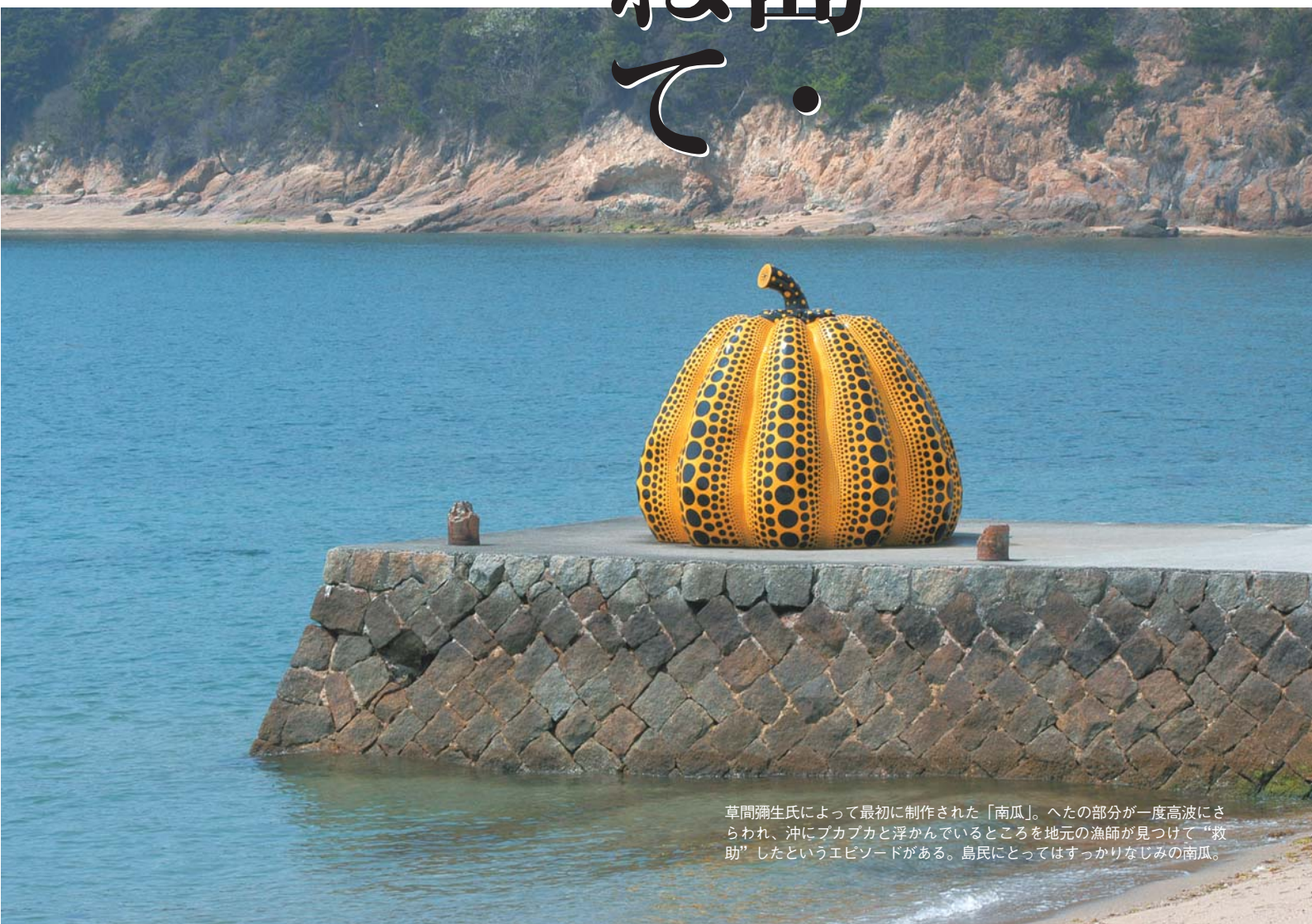
香川県香川郡直島町

なおしまちよう

# アートの島・ 直島を訪ねて

瀬戸内の小さな島・直島では  
現代アートが日常生活に溶け込んでいる。  
アーテリストだけでなく、芸術を愛する人、  
島に暮らす人、さまざまな思いによって生まれた  
「アートの島」。そこには、  
故郷を愛する人々の誇りと、  
文化を支える心意気があった。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己



草間彌生氏によって最初に制作された「南瓜」。へたの部分が一度高波にさらわれ、沖にプカプカと浮かんでいるところを地元の漁師が見つけて“救助”したというエピソードがある。島民にとってはすっかりなじみの南瓜。



「海の駅なおしま」は、今を時めく設計集団SANA Aの設計。観光案内所や土産物屋、観光協会事務局が入っている。



## 瀬戸内の過疎の島が世界的な評判を得るまで

高松からフェリーでおよそ一時間。高松市の北一三kmに位置しているのが、人口三五〇〇人ほどの直島である。フェリーが発着する宮浦港が近づく、船内でくつろいでいた作業着姿の男たちが次々に姿を消していく。船に積まれた大きささまざまなトラックに乗り込んで、接岸に備えるためである。彼らの姿を見

ていると、直島では土木作業を伴うさまざまな工事が盛んに行われていることが分かる。経済的に元気なのだ。

やがて春霞の向こうの棧橋に、赤い大きなオブジェが見えてきた。有名な草間彌生の「赤かぼちゃ」である。日本よりもむしろ海外で名高いアーティストの草間は、直島にふたつのかぼちゃのオブジェを提供している。赤くて大きな「赤かぼちゃ」は黒の水玉模様を描かれ、ところどころに穴が開いて、中に入って穴から外を眺めることができるようになっていく。大人から子供にまで大人気だ。到着したばかりの観光客が、早速カメラを向けていた。

港のすぐそばに建てられた待合室や観光協会、土産物店が入った「海の駅なおしま」は、日本中どこにでもあるような観光施設とは一味違い、白い鉄骨と大きなガラス、コンクリートで構成されたシンプルな建物である。設計は世界的な建築家・妹島和世氏と西沢立衛氏によるユニットSANA A。直島町観光協会事務局長を務める奥田俊彦氏は、そこで取材チーム

直島の玄関口・宮浦港にある草間彌生の作品「赤かぼちゃ」。船が島に近づき、まず見えてくると、船内の観光客から歓声があがる。



を待っていた。

奥田氏は長年直島に工場を持つ三菱マテリアルに勤め、退職後は悠々自適の日々を送っていたが、二〇〇三年、直島町観光協会が「まちの案内所」で直島町内の案内業務を開始するにあたって現職に就任。当初は直島環境センターなどを見学するエコツアーの世話役がメインだった。そんな奥田氏の日々が一変したのは、二〇〇四年、地中美術館の開館により、直島が「アートの島」として広く知られる

ようになって以来のこと。

「もともと直島は三菱マテリアルだけじゃなくて、同じ非鉄金属の同和鉱業が入っていたんです。当時の直島町長・三宅親連氏は、島の北側を経済を支える基盤となる地域へ、中央部を文教を中心とした教育や生活の場に、そして、国立公園特別地域に指定されている南側を、観光地として開発したいと考えていました。バラバラに乱開発するのではなく、ひとつの業者が全体をバランスよく開発し、自然との触れ合いができる気品ある観光地を目指したのです。そんな難しい条件で開発に協力してくれる先があるとすれば、藤田観光の小川栄一さん以外にいな



直島町観光協会の奥田俊彦氏。長年勤め上げた会社を定年退職後、友人である町長に請われて現職についた。「楽しんで、楽しんで」と、毎日飛び回っている。



安藤忠雄氏設計による地中美術館。地中美術館はもともとクロード・モネの「睡蓮の池」を直島的に解釈して展示することから構想されたという（写真提供：（財）直島福武美術館財団、撮影：藤塚光政）。

い、との助言を得て、昭和三十六年に開発が始まりました。実際、小川さんはすごい方で、昭和四十一年にはもう、キャンプ場や海水浴場をオープンさせました。でも時代がまだ合ってなかったんでしょ。国立公園の規制が大きな壁となり、また、ドルシヨックやオイルシヨックの影響で経済の勢いも減退し、計画は自然消滅みたいな形にな

って、土地だけ置いとったわけですよ。

そこに前の福武書店社長（現ベネッセコーポレーション）の故・福武哲彦さんが入ってこられた。当時の町長の甥御さんが福武書店で働いていたのですが、世界中の子供たちがキャンプでさるような場所をつくりたいとおっしゃっていた福武さんに、『それなら、直島に土地がありま

すよ』と紹介したのが発端です」

塩漬けされていた土地を丸ごと買い上げた前社長の跡を継いだ長男の総一郎現会長は、世界的建築家・安藤忠雄氏に「直島に美術館を建ててほしい」と持ちかけた。そこで一九九二年に生まれたのが、ベネッセハウスという美術館兼ホテルである。

## 現代アートが直島にもたらした経済と心理的效果

ホテルのない直島では、美術館を楽しむにもまず宿泊施設を造らなければならなかった。ベネッセハウスは「泊まれる美術館」として、少しずつ美術ファーンに浸透していく。だがこの時点では、直島住民にとって「アート」はまだ遠い存在に過ぎなかった。

「現代アートっちゅうてもねえ（笑）。よく分からん。ホテルだって、ベッドがあるようなホテルなんか、直島では初めて」

直島の北側半分は、現在でも三菱マテリアルの工場や関連施設があり、観光客は立ち入るこ

とができない。残り半分は、坂こそ多いものの、その気になれば自転車ですぐ回れるほどの広さである。そのうち、ベネッセコーポレーションの買い上げた土地が相当の面積を占めている。これほど広い私有地を、ひとつのテイストで開発した例は、日本の中でもそれほどないはずである。観光地にありがちな派手な看板もなければ、にぎやかだが統一感のない商店街もない。その代わり、さまざまなアートが静かな存在感を放っている。

「ベネッセハウスができたばかりの頃は、まだ地元の人間に経済効果はさほどもたらされなかったんです。だけど、福武総一郎現会長は、地元から金を吸い上げるようなことは全然せん人で、ベネッセハウスは町民なら何人か連れてきてもよろしいと、住民がタダでアートを楽しめるようにしてくれました。もともね、最初は感想としてはようなかったですけど（笑）」

無理もない。高齢者の多い直島で、現代アートになじみのある島民はほとんどいなかったは





ずである。それが変わってきたのは、作品を作るアーティストが直島を訪れるようになったこと。彼らの創作過程を直接目の



風情ある本村地区。各家が美しい暖簾を掲げ、その奥に広がる手入れの行き届いた庭とともに、訪れる人々の目を楽しませる。

当たりなし、人柄や情熱に触れ、作品に対する距離感が縮められていったことや、日常の居住地域にアート作品が展示され、これまで慣れ親しんできたものとアートが融合し、新しくもたらされた美しさに刺激を受けたことも大きく影響している。

父哲彦氏の夢を受け継いだ総一郎会長は、二〇〇四年、ベネッセハウスの次に、「地中美術館」をつくった。文字通り、瀬戸内海の風景を壊さないよう建物のほとんどが地中に埋まっているユニークな外観の美術館である。ここには大きなモネの「睡蓮」の絵や、ジェームズ・タレル氏の光のアート「オープン・ワールド」、ウォルター・デ・マリア氏の「タイム／タイムレス／ノー・タイム」などが収められている。

地中に埋められていながら、計算された自然光が自然に美術館の中に差し込み、時間帯によって不思議な光が作品に陰影を添える。なんとも贅沢な美術館なのだ。ここに至って直島の評判はますます高まり、海外にも

「シー・オブ・タイム98」宮島達男（写真提供ベネッセアートサイト直島、撮影 上野則宏）。「角屋」の内部には、一二五個のカウンターが、一から九までの数字をそれぞれ刻んでいく。点滅スピードは、島の子供からお年寄りまで様々な人々によって設定され、不思議なハーモニーを醸し出している（右）。



知られるようになった。恐らく、人口三五〇〇人の島で、これだけ外国人の姿を見ることはないだろう。現代アートを集めた斬新な発想が、東京を中心とする大都会や、海外で注目を集め始めたのである。それはやがて、経済効果をもたらし始めた。

「みんな高いお金を使って飛行機とフェリーでここまで来る。ホテル代だって高い。それでも世界中から来る人がいるってことが、住民の刺激になったんじゃないかな。そうか、直島はそんなすごいことになったるんか、って。そのうち、募参りに帰ってくる人間も増えてきた」  
都会に出たまま帰らなくなっ

本村地区「家プロジェクト」の最初の作品、宮島達男「角屋」。築二〇〇年余の民家を修復して、内部にアート作品を展示している（右）。



ていた若者たちが、募参りに戻ってくる。しかも家族や友人を引き連れて。「アートの島が故郷」と自慢できるようになったからこそその現象だろう。

日本中どこでもそうだが、過疎化と高齢化が進んでいる地方の悲願は、若者が地元に住み、子供を産み育ててくれることである。税金などの問題もあるが、それ以前に子供たちの声が聞こえない土地は寂しい。たとえどんなに美しい自然に恵まれていても、だ。

直島はベネッセコーポレーションが入ってきたことで世界に知られるようになり、高齢者も元気になったといわれる。人々

ベネッセアートサイト直島の立ち上げ当初からプロジェクトに関わってきた直島事業部長 笠原良一氏。



「ザ・フォールズ」千住博（写真提供：（財）直島福武美術館財団、撮影：渡邊修）。この絵が設置されている「石橋」は、製塩業で栄えた家。ひんやりとした蔵の中で滝の絵を眺めていると、滝のしぶきやとどろきまで感じられてくる。

## 本当に直島が「アートの島」になるまでの試行錯誤

直島の南側は、ベネッセコーポレーションが買い上げた私有地となっている。その落ち着いたたたずまいは、「アートの島」にふさわしいが、もう少し地元の人々と触れ合いがあってもいいという気になる。その触れ合

の注目が集まれば、家の周りをきれいにしよう、花でも植えようと思うのは人情である。それがさらに若者のU・イターンにまでつながっていくとしたら……。それは観光協会事務局長である奥田氏の夢でもある。

いを味わえるのは、古い民家が残る本村地区である。ここには、瀬戸内海の古い建物によく見られるように、羽目板を黒く焼いた「焼け板」の家屋が建ち並んでおり、南側とはまた違った落ち着きをもたらしている。

だが、たたずまいに感心してばかりいると突然驚かされる。ここは古い時間を閉じ込めた集落ではない。ベネッセコーポレーションが主導した「家プロジェクト」の舞台でもあるのだ。古い家々を、アートを表現する場に変える。このプロジェクトがあったからこそ、直島は本当に「アートの島」として変貌を遂げたのかもしれない。

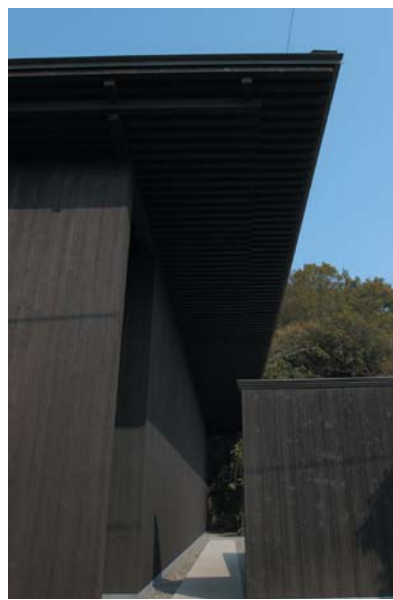


「舌上夢／ボッコン観」大竹伸朗。会場名は「はいしゃ」。もともとは歯医者さんの家だった。建物の中も外も、面白いものがぎっしり詰まった作品。以前住んでいた子供が描いた壁の落書きをそのまま生かして作品に。外には潜望鏡が突き出し、裏の部屋には「女神の自由」が鎮座する。観る者は童心に帰り、皆一様に自然と笑顔になる。

ちょうど取材した四月上旬は、「NAOSHIMA STAND ARD2」と名付けられた現代アート展が家々を舞台に開かれていた。本村地区一番の素封家だった石橋家の建物に入ると、そこは千住博氏の「フォーリング・カラース」と名付けられた滝の連作が展示されている。石



いずれも「家プロジェクト」の作品。安藤忠雄氏設計「南寺」（右）と「護王神社」（上）。杉本博司氏の設計による護王神社の地下には石室が造られている。暗い石室から外に出ると、一転して眼下に瀬戸内海の澄んだ青が広がる仕掛けで、生と死を視覚的に捉える効果を引き出している。





風に揺れる美しい暖簾の数々（上）。昔ながらの屋号が書かれた表札（下）。屋号は今も直島の人々の日常会話に出てくるといふ。島民それぞれが島のアートに参加している。



橋家は製塩で発展した家で、母屋も隣接する土蔵も当時の豊かさを語る見事な造りだった。土蔵の床は高い技術を持った塗師の手によって黒く塗られ、千住氏が描く「ザ・フォールズ」の滝が鮮やかに映し出されている（「石橋」）。

本村の入り口には、歯科医院だったという古い建物が、大竹伸朗氏の手によって現代アート作品に生まれ変わっていた。一階と二階がぶち抜かれて、白い女神の像「女神の自由」が鎮座している（「はいしゃ」）。生協のうどん店から坂を登っていくと、ペンキ塗りの古い理容院の中に昭和三十年代の部屋が再現され、人間よりも大きな布製の赤いタコが、どてらを羽織ってラジオの野球中継を聴いていた（三宅信太郎「魚島潮坂蛸峠」）。ちなみに三宅氏は昨春秋、タコの着ぐるみに身を包んで、島の稲刈

り（これもプロジェクトの一環）に参加したそう。そのとき、タコを見つけた地元の子供たちの目は大きく見開かれたという。

ベネッセコーポレーションで直島事業部長を務める笠原良二氏は言う。

「九二年にベネッセハウスを作ってからしばらくの間は、南側の一帯を中心に瀬戸内海の自然と現代アートの組み合わせを中心テーマとしてアート活動に取り組んできました。その後、島の歴史や人々の暮らしへの視点も重要との認識の下、九八年から『家プロジェクト』そして〇一年の『THE STANDAR』展へと展開していったわけです。その一方で、アートの島としての深みを生み出すために、美術の核が必要と考えました。それが〇四年開館の地中美術館です。従って〇一年の『THE STANDAR』と今回の展覧会はそのままずっとつながったわけではなく、地域に広がった後に、一度中心をつくり、その後改めて地域へ出て行った形になっています。今回

も多くは本村の家を舞台にしているのですが、そこでも変化があります。現代アートの展覧会でありながら、日本画の千住博さんに参加していただいたのもその一例ですね。現代アートファンだけでなく、より幅広い方たちに来ていただきたいという願いも込めています」

年齢も表現方法もさまざまなアーティストが集う島。作品を収めるだけでなく、島を訪れ、あるいは暮らしながら表現を模作することで、古い町並みから刺激を受け、町に刺激を与えていく。その交流の仕組みがあるからこそ「アートの島」なのであって、ただ美術館をつくって作品を並べてみても、到底実現



八幡神社参道入り口の明神鳥居。直島産の花崗岩で造られており、香川県の有形文化財に指定されている。

ボランティアガイドの会・会長高橋昭典ご夫妻。楽しみながら独学で現代アートを学びガイドを務める。さらに直島の歴史にも詳しい高橋さんは、城下町の文化の豊かさが、今の直島の現代アートが根付く素地になったと解説する。



できない空気がここには流れているのだった。

本村地区にある農協のスーパーマーケットとして使用されていた建物を改修(空間デザイン西沢立衛氏)し、「本村ラウンジ&アーカイブ」が置かれ、さまざまなミュージアムグッズが売られている。「NOSHIMASTANDARD2」のために作られたカタログやポストカード、参加アーティスト推薦の本、さらには町歩きに備えたおにぎりも限定販売されていた。

「町の人にはもちろんいろんなご意見はあると思います。しかし、少しずつ面白がってくれている方が増えてきて、協力して

くださる。それが嬉しいです。当社の会長も、島が、地域が元気になることがひとつのスタートで、それがやがて全体を元気にすることにつながるのではないかと申しておりますね。実際、関わってくださっている直島の方たちは、高齢の方でも皆さんお元気ですから」

今年、団塊の世代が大量に定年を迎え、地域に帰る。そのときに、人々が元気になるモデルのひとつが直島であればいいと、笠原氏は力を込めた。

## 蓄えられた知識を生かして ボランティアガイド

本村では、観光ボランティアガイドを務める高橋昭典氏が案内役となってくれた。取材前に「まず歩きましょう」と高橋氏が言う。高橋氏のガイドは、直島の古代史から始まる。高橋氏は長年山陽新聞の直島通信局員を務めてきた。「直島のことだから、隣の猫が子を産んだことまで知っていた」という。

「遣隋使や遣唐使の時代、ここ

直島で祭祀をやったという記録があります。直島の原点は土器製塩です。土器にかん水を入れて炭で炊き、塩を作るんです。いちばんうまい塩ですよ。そういう製塩を、先頭を切ってここでやっておったわけです」

仕事と趣味を兼ねて、長年直島の歴史を勉強してきた。知識は蓄積される一方で、なかなか吐き出す機会に恵まれなかったが、直島がアートの島となり、古い集落に過ぎなかった本村地区が「家プロジェクト」の中心地となった。

最初は「よそ者」であるアーティストに警戒心を持っていた住民も、彼らが表現にける情熱と努力を目の当たりにするにつれて、何くれとなく面倒を見るようになった。声をかけて話をしたり、差し入れをしたり。それによって、互いに共感が芽生えていったという。

「そのうち僕もね、形だけでもガイドのようなことがでけんかなと思ひ始めたんです。せっかく世界に発信するような現代アートの作品があるんやから、つ

いでに直島の郷土史も発信しちゃおうと思って(笑)」

まだ観光ボランティアガイドの会は創設されて三年目。だが、高橋氏の名調子を聴きながら町を歩いていると、静かな町が急に人間臭さを帯びてゆらりと立ち上がってくるような気になるから不思議だ。家々の歴史、そこで営まれた事業の盛衰。真言宗の寺にある、海難事故に遭って死んだ人々の墓。本村の人々は、悲運の死者を篤く弔う心を持っていた。

家々の門や扉には、美しい暖簾が揺れていた。アーティスト加納容子氏が年に何枚か制作してくれる暖簾は、今では順番待ちの人氣を誇る。

「もともと本村では、戦後食うものもろくにないころに文楽を立ち上げてるんです。それはすごいことですよ。みんなで力を合わせるまとまりがあったつちゅうことです」

高橋氏は胸を張る。故郷に対する誇り。それこそが「アートの島」「何度でも訪ねたい島」を支える原動力なのである。